



由比駅での受付



由比駅の位置

このウォーキングを企画したのは、静岡県健康生きがいづくりアドバイザー協議会（通称：健生しずおか）です。会長の藤田秋夫さんは藤枝に住んでいて、この日もスタッフとして参加していました。静岡市と藤枝市が共同して日本遺産への申請をして、この程認定されました。今回健生しずおかが歩いたのは認定されたコースのうち、由比駅から興津駅まででした。コロナ禍の影響もあり参加者が8名と少なかったが、久しぶりに実施できたウォーキングでした。

由比の特産物は桜えびで、駿河湾が唯一の漁場と言われています。そろそろ秋漁が始まる頃です。我々は由比駅に集合して、準備運動などした後出発となりました。



名主の小池邸



風流な水琴窟

最初に寄ったのは江戸時代名主を長年務めたという小池邸でした。江戸時代風のつくりの建物の内部は、土間と座敷が区分されていて、座敷の奥には何幅かの掛け軸があり、名主という村役人の佇まいが感じられました。

庭には江戸中期に作られたという水琴窟がありました。当時の豪農の家には珍しくないしつらえで、音響効果を楽しんでいた生活ぶりがうかがえます。現在静岡市の所有として一般開放されていて、ボランティアガイドの方が水を注いで音を出して説明してくれました。



藤屋とも称された茶店



望嶽亭とも称された

薩埴峠（さった峠）の東口に、今は店を閉めています。藤屋という茶店が江戸時代にはありました。港に近い立地条件を生かして、新鮮な魚貝類の料理を出す店でした。その他に呼称がいくつかありまして、坂の入口にあることから坂口屋という屋号もあり、また富士山の眺めがいいことから望嶽亭とも称されていました。



この店は、幕末新政府軍として駿府まで攻め寄せてきていた西郷隆盛に会うため、徳川慶喜の使者としてきていた山岡鉄舟が追手からの難を逃れるために、舟で救出に来る清水次郎長を待って、一時潜伏した所と言われています。



[雲の上にそびえる富士山](#)



[駿河湾の先に伊豆半島](#)

当日は天気が良く遠く山々、伊豆半島、駿河湾など輝いて見えました。写真のように、雲で装いをした富士山の雄姿も望められました。また、海から吹いてくる潮風も心地よく、参加者全員が「すばらしい、気持ちいい」を連発していました。このように展望台の眺望は抜群でしたが、9月には日差しが強くやや下った日陰のベンチに腰掛けて昼食をとりました。

薩埵峠(さった峠)のいわれについて、興津地区まちづくり推進委員会の説明書きによると「鎌倉時代に由比倉沢の海中から網にかかって引き揚げられた薩埵地蔵(さった地蔵)をこの山上にお祀りしたのでそれ以後薩埵峠(さった峠)と呼ぶようになった」と記されています。また、「明暦元年(1655)、朝鮮使節の来朝を迎えた」ことが契機に開発されたとも記されています。

さらに、薩埵峠(さった峠)は南北時代には足利尊氏と足利直義の戦いがあり、戦国時代には武田信玄と今川氏真の合戦が行なわれた所でもあります。



[薩埵峠を歩く参加者](#)



[薩埵峠の4コース](#)

薩埵峠(さった峠)は山が海に突き出た地形で、東海道の三代難所の一つと言われています。地図に示された4本の道は時代とともに変わりました。表示板によると次のように下の道から順に説明されています。

下道は「親知らず子知らずの道で海岸の波打際を道路として利用していました。安政元年(1854)の地震で海岸が隆起し、それ以後再び道路として利用されるようになりました。」です。

中道は「慶長年間から明暦年間まで主として利用されました。慶長6年(1601)家康、伝馬制度(使者や物資を馬で運ぶ交通制度)を設け、慶長9年(1604)五十三次宿駅制度確立。承応3年(1654)峠道を開く。」です。

上道は「参勤交代で諸大名も通った道です。明暦元年(1655)9月、江戸幕府は朝鮮使節の一行を迎えるにあたり開いた道で幕末まで利用されました。」です。

脇道は「通称『じぞうみち』といい、上古から通行に利用されています」です。

予定ですと、余裕のある人は清見寺まで足を延ばすことになっていましたが、歴史ある文化と抜群の眺望に満足して興津駅までで全員家路につくことになりました。

取材: 静岡地区担当 生きがい特派員 早川和男